

ウズベキスタン事務所から ひとこと

サッカー隊員として派遣された相馬さんの目的は、スポーツを通じて青少年の健全な育成を図り、選手の能力を向上させること。個人プレーに走りがちな子どもたちにとって、相馬さんが指導する連携プレーの練習は地道なものが多いのですが、「考えるサッカー」「チームでプレーすること」を目標に、子どもたちと一緒に楽しく活動しています。帰国後は、この経験をぜひ日本の学校で生かしてください。



企画調査員(総務・ボランティア事業)*
水野茂博(みずの・しげひろ)

*隊員の活動全般を支援する「ボランティア事業支援のプロ」。また相手国の要望を調査して要請開拓を行うなど、隊員活動全体の運営を行う。



周りをよく見て!

チームプレーを大切にしたサッカーを教えています

JICA海外協力隊 がゆく Vol. 16

in ウズベキスタン

相馬 芳紀

そうま・よしき 33歳
出身地:東京都 職種:サッカー
任期:2018年7月~2020年3月



+one information

“青の都”サマルカンド

ウズベキスタンの古都サマルカンドはユネスコ世界遺産にも登録されている観光都市で、“青の都”と呼ばれています。その名の由来は晴れて青空が広がる日が多く、また少しでも空に近づけるようにと壮大な青いモザイク模様を描かれたイスラムの建築物が多いからと聞きました。この街にいと、ティムール朝やチンギス・ハーン、シルクロードなど高校生の頃に世界史で習った言葉が頭に浮かんできます。

サマルカンドは観光立国を目指すウズベキスタン最大の観光地で、日本からも多くの観光客が訪れています。イスラム建築群の多くが集中するレギスタン広場は、サマルカンドの中心地でとてもエキゾチック。日本とはまったく違う品々が並ぶバザール(市場)も魅力的です。もちろん、羊肉や牛肉が中心の料理やチャイ(お茶)などもおいしいです。

サマルカンドでは、多くの人々がウズベク語、ロシア語、タジク語を日常的に話しますが、英語は話せない人が多いようです。近年は外国語教育に力を入れており、観光名所で座っていると日本語や英語を学んでいる学生に声をかけられることもしばしばあります。専攻する言語の習得のために話しかけているのだそうです。日本では恥ずかしさが先行して躊躇するようなことでも積極的に、真っ直ぐなところがウズベキスタンらしいな、と感じています。

そんなウズベキスタン、ぜひ訪れてみてください。(相馬芳紀)



イラスト・さかがわ成美

ともにプレーをしながら、ボールだけでなく周囲を見ることの重要性を教える相馬さん(左)。



雪が降った日、練習に集まった子どもたちと。



おたがい真剣勝負!

指導しているチームと日本のJリーグユースチーム(高校生年代)との交流試合。



日本で実践されているサッカーの指導法を取り入れたいという要請を受け、サマルカンドスポーツセンターに所属し、サッカーのコーチとして活動しています。高校で教師としてサッカーを指導してきた8年間の経験を生かせると考え、現職教員特別参加制度を利用しました。

私が指導しているのは、12歳から18歳の子どもたち。2018年にウズベキスタンサッカー協会が設立したサマルカンド州内のチームで、実質的にはプロの下部

実際にプレーを見せて、周りを見ながらプレーすることの大切さに彼ら自身で気づくような指導を心がけました。そのうえで、練習や試合で多くの状況を考え、適切な判断ができるようになってほしいと考えています。

こうした経験は私自身にとっても刺激になりましたし、日本のスポーツで大切にされる協調性の素晴らしさを再確認しました。派遣が終了した後も、指導をするときにはそのつど現場で求められることを理解し、実践できる力をつけていきたいと思います。

組織です。そのほかに、スポーツセンターのサッカースクールで定期的に教え、さらにいくつかの小中学校を巡回しています。

サッカーはウズベキスタンで一番人気のあるスポーツで、ワールドカップとオリンピックへの出場が国民の悲願です。選手たちはドリブルで突破するなどの個人プレーが好きですし、また得意ですが、周囲を見て行う連携プレーはすこし苦手。そこで、苦手を克服してもっとサッカーが上達するように協調性を養い、チームプレーにつながる練習を取り入れました。

しかし、今まで反復して技術を身につける練習が中心だった選手たちにとって、攻撃と守備に分かれて実践的に練習は経験がありません。その意図や目的がわからず、サッカーの原理・原則を教えることがこんなに難しいのかと落ち込んだこともありましたが、いっばいで同僚のコーチからは「毎日専属で来てほしい」と言われ、こうした指導が必要とされていることも感じました。

どうしたら子どもたちに練習の意味を伝えられるのだろうかと考えていたときに気づいたのは、日本とは文化や環境の違う国だからこそ、人への伝え方も変えなければならぬということ。ただ言葉で教えるのではなく、体を動かし、